



中原邦平著

限定三百部復刻

維新快挙録

# 井上伯伝

全三巻

マツノ書店

内容見本

井上伯伝

卷之三

三

歸りて、之を報告すると同時に、竊に密議する所あり  
 たり、彼等は既に宍戸備前の内話に依りて君の秘策  
 を知り、今又伊勢の言に依りて君の強硬なる主張を  
 審にするを得たり、安んぞ激怒せざるを得んや、彼等  
 が君を暗殺するの意は此の時に決したりと云ふ、君  
 は斯る陰謀あるを知らず、僕淺吉の燈光に誘はれ、暗  
 夜を歩行して、讚井町の石橋袖付橋と名くに達せざること、凡  
 そ一丁許の處に至りし頃、一士人あり、卒然君に向つ  
 て姓名を問ふ、君乃ち井上聞多なりと答ふ、其の言畢  
 るや否、更に一人あり、君の後ろより兩足を拘束し、其  
 背を推して前に倒す、君の俯伏するや、又他の一人大

伯爵・井上馨でなく志士・井上聞多の伝記として、また高杉晋作・久坂玄瑞・坂本竜馬など幕末の志士たちの行動と実態を知る上でも不可欠の文献。

刀を揮ふて之を研る、此の一撃にて君の身體は兩斷と爲るべき筈なりしに、幸なる哉君が俯伏の際、佩帶の大刀背部に横はりて、之を障へたれば、刺客の刀刃は脊骨に入る僅に三分許にして止まれり、君は此の重傷に屈せず、起立するの際、又一刀を後頭部に受け、既に起立して、佩刀を抜き扞禦せんとするの折柄、刺客の一人又前面より一撃を加へ、右頬より唇に掛け、深く斬り込みたり、其の他下腹部及脚部にも數ヶ所の刀創を受け、到底免るべからざる勢なりしが、如何なる機會やありけん、君は忽ち身を翻へして、其の影を匿したり、刺客等は頻りに其の近傍を搜索した

トニ自事 第十八 遭難及幽囚

四一

佳持のふりかたをいふ身離  
流願沛、僅に、尊懷之  
志、下、彼、駭、駭、難  
合、ん、志、以、交、す、の、會、數  
上、何、を、一、數、を、お、思、漏

も、は、儀、演、然、見、苦、數  
振、舞、を、る、る、也  
石、田、志、と、契、約、は、違、背、  
は、耐、り、數、意、を、合、倫、辨  
第一、海、引、學、を、お、お、か、

組、中、甲、合、詰、腹、に、及、ぶ  
年、一、依、り、天、神、地、祇、  
に、誓、ひ、血、盟、す、る、事、  
以、件、  
天、文、二、年、以、上、月

甘、高、杉、晋、作、意  
久、松、玄、仙、傳、意  
大、和、八、八、原、其、  
長、夜、由、藏、來、和

上巻

中巻

下巻

第一 家系及家庭	第一 家系及家庭	第一 家系及家庭
井上一族の誅戮 勤儉の家庭 志道家の養子 養父母の家庭ほか	者の激昂 公の内論 君の決意ほか	高杉の病没ほか
第二 教育及就社	第十四 復命後の事状	第三十三 討幕の計画
明倫館 江戸在勤 撃剣修業 蘭学修行 西洋銃陣 攘夷論と英学修業ほか	近畿の形勢 伊藤の江戸行 君の秩行 父子の生別離 高杉訪問ほか	山県狂介の上京 村田新八の来藩 後藤家次郎の意見 三条岩倉二卿の合体 大久保、大山の来藩 討幕の密勅 将軍政權返上の疏ほか
第三 安政万延年間の形勢	第十五 和戦の議論	第三十四 三藩連合の出師
明倫館 江戸在勤 撃剣修業 蘭学修行 西洋銃陣 攘夷論と英学修業ほか	外艦来襲の報 御前会議 京師の敗報 馬関の開戦 講和使一行の出発ほか	公父子の大久保、大山引見 出兵手順の約束 広沢、小松の密勅奉福 我が兵の出発 会桑三藩の激昂ほか
第四 航海遠略の献議	第十六 講話談判	第三十五 王政復古の大号令
朝暮の乖離 密勅の降下及其の奉答 戊午の大獄 桜田の変ほか	談判の開始 攘夷党の激昂 高杉、伊藤の潜伏 大砲引渡の困難 君の諫諍 条約締結ほか	大号令発布の期日及其の延期 朝廷及岩倉邸の驚動 改革当日の部署 大号令の発表 西郷の意見 岩倉卿の決心 慶喜退官納地の議決ほか
第五 藩論の一変	第十七 武備恭順論の主張	第三十六 長兵の入京
慶親公の憂慮 長井の上京及東下 形勢の激変 伏見寺田屋の変ほか	俗論の沸騰 正義派の対抗 君の決策 御前会議 国是の決定ほか	山崎関門の応接 朝幕間の交渉 先鋒の関門通過 京都市民の感動ほか
第六 世子公の東下	第十八 遭難及幽囚	第三十七 五卿の帰洛
薩長の関係 世子公の周旋 君の江戸在勤と海軍修業 壬戌艦の購入ほか	退出途中の奇禍 負傷の惨状 母氏の愛護 手術の状況 幽囚中の奇話ほか	二条城の騒擾 尾越二候の周旋 徳川慶喜の下阪 岩倉卿の下問 三条邸の会議 君の豪語ほか
第七 外国公使襲撃の企図	第十九 遭難後の形勢	第三十八 徳川氏の処置
公使刺殺の密議 調金の苦策 土藩士と周布政之助 君等同志の処分ほか	三大夫四参謀の処刑 高杉訪問及脱走 諸隊の運動 諸隊の長府移転ほか	春賦と岩倉卿の交渉 大阪表形勢の激変 大久保の建言 越前邸最後の会議 伏見開戦の報 官軍の連捷ほか
第八 御殿山公使館の放火	第二十 馬関の義挙	第四十 山陰道進軍の策
血盟書 焼弾の製造 福原の苦策 放火の状況 高杉の剃髮ほか	高杉の入筑及帰国 五卿渡海の紛議 高杉の激発 馬関の挙兵 討幕機	伏見開戦の報 官軍の連捷ほか
第九 洋行	第二十一 正俗両党の戦	第四十一 山陰道進軍の策
象山の論旨 五千両の金策 上海の所感 航海中の困苦 倫敦留学中の状況 帰朝の決心 帰航中の遭難ほか	諸隊の行進 給堂の夜襲 君の脱囚 鴻城軍創立 太田の戦 佐々並の戦 諸隊山口屯集 諸隊の進軍ほか	高杉、久坂等の「血盟書」をはじめ、志士たちの書簡等四十二編がほぼ原寸大で納められています。スペースの都合で目録は略します。
第十 帰朝前における内国の形勢	第二十二 国是一定	
我が藩の攘夷 真木和泉の意見 親征の詔勅 堺町門の変 七卿の西下ほか	慶親公父子の引責及告祭 公の山口移転 宗支一和 諸隊配附ほか	
第十一 英国公使との交渉	第二十三 君と高杉の亡命	
ガワルトとの会見 サトーの紹介 英公使との会話 英国の青書ほか	高杉、伊藤の西航及其の帰国 馬関開港論 長府藩士等の激昂 君と高杉の死亡 桂の帰国ほか	
第十二 開国論の主張		
姫島より山口帰着 開国論の勸説 御前会議申請 両公へ進退ほか		
第十三 姫島の決着		
開国論の否定 攘夷遂行の令 攘夷論		

↑内容見本(現物の十六分の二)

隱遁の志を決し、國に歸りて家に閉居したり、  
 初め君が高杉を誘ふて京都に歸りし時、三條通の旅  
 店に投宿せしに、入江九一、野村和作の二人訪ひ來り  
 て曰く、今や君公御父子は夙夜國事に盡瘁せられ、朝  
 廷に於ても大に御憂慮の折柄なれば、吾々同志の士  
 も朝廷及君公の御苦心を察し奉り、妓樓又は旗亭に  
 遊びて國事を談ずる等の事は、愼まざるべからず、故  
 に以後は妓樓及旗亭に上ることを廢し、萬一之に違  
 背する者あれば、詰腹を切らすとの約を定めたり、貴  
 君等も宜しく此の盟約に加入すべしと、高杉之を聞  
 き、大に憤激して曰く、僕等は既に一死を決して外國

公使を斬殺し、以て攘夷の實を舉げんとしたり、切腹  
 を怖れて、女郎買を爲す能はざるが如き軟骨漢にし  
 て、何事をか成し得べきや、僕は只今より率先して妓  
 樓に上るべしと、言畢るや、直ちに起つ、君も亦之に同  
 意し、相共に何れへか立去りたり、故に入江、野村の勸  
 告は何の効もなかりし、當時君等同志の士は狹斜に  
 豪遊し、暴飲放論するを常とせしが、中に就き君と高  
 杉、大和、長嶺の四人は攘夷實行の首唱者として、同志  
 中にて特に推重せらるゝの風ありたりと云ふ、



# 『井上伯伝』の復刻を喜ぶ

奈良本 辰也

元勲として明治の政界に君臨した井上馨について語ろうとすれば、何か心に残ることがある。西郷隆盛が「三井の番頭どん」と呼びかけたことがあると言われているほどに、彼ほど財界に癒着した人物は居なかった。

しかし、その前半生を考えると、彼ほど波瀾万丈の世界をくぐり抜け、維新の功業を全うした人物もあまり居ないであろう。このたび復刻される『井上伯伝』は、そうした彼の前半生について語られたものの一つである。

いわば復権の書とでも言うべきか、誰かによって成されなければならない仕事であった。そこで、この仕事を遂行するにもっともふさわしい人物が現れたのであった。毛利家の家史編纂に従事し、文部省維新史料編纂会常任委員でもあった中原邦平である。

中原邦平は、大島郡久賀町の生まれで、幼年より日蓮宗の僧加藤有隣について漢学を学び、長じては東沢瀉の門に入って陽明学を修めた人物であるが、後に吉田松陰と親交のあった秋良敦之助に従って江戸に出、ここでは宣教師についてロシア語を修得したという、まさに八宗兼学の学者であった。

その彼が手がけた著書には、この『井上伯伝』の他に『日清露の関係』『伊藤公実録』『忠正公勤王事績』『長井雅楽詳伝』等がある。その叙述はまことに厳正で、常に史料に頼って事実を鮮明にしようとする態度を貫いている。

見るべきものはすべて見、聞くべきものはすべて聞き、遺漏するところがない。私も以前、長井雅楽について一書をもつたことがあるが、彼の著書には大いに学んだものだ。『井上伯伝』に於てもその態度が貫かれている。彼は嘉永六年の生まれで、明治四年、井上が大蔵大輔になったとき東京に出てきたのであるから、同時代人として井上のことを知悉していた。後年の井上も彼をよく知っていたに違いない。それだからこそ、あれだけの著書ができたのである。映入りで付録ともに九冊、なかなかの大著だ。

本書には高杉晋作や桂小五郎など、維新期の代表的人物も余すところなく語られている。その人物たちの血湧き肉踊る活躍は、たくましくして語られる内容だ。私も、それを読んで感激したが、昭和七、八年の頃、これを読んで一大長編小説を書いた一人の男がいた。いまはすっかり忘れられたが、林房雄である。彼は戦前にラヂカルな左派から右派に転向した作家であるが、その作品は、まさしく本書『井上伯伝』に触発されて書いたものだった。

『青年』がそれである。その中で、彼は井上と伊藤を主人公として活躍させ、彼らが導き、攘夷運動に意を燃やしながらイギリスに渡航し、その文明に触れて開国論者となり、日本に帰って身の危険を感じながらも、あくまで開国主義者として輿論の展開を計ろうとする。そして国難を避けようとしたのだ。彼はここに二人の青年時代を見たのである、いや、日本の青年時代の夢と希望を見たのであった。

私はこの『井上伯伝』を手取る  
とき、いつも林房雄の『青年』を思  
い出す。

このほど、本書が扱いやすい洋本  
三冊にまとめられて復刻されるとい  
う。若き日の井上馨復権のためだけ  
でなく、維新史研究のためにもまこ  
とに喜ばしいことといえよう。



井上聞多・伊藤博文など長州藩の  
秘密留学生たち。ロンドンで撮影

## 生き証人が語る 明治維新の源流

- ▼本書は、中原邦平の代表的著作である。
- ▼毛利家史料編纂所の主幹を長くつとめ、明治期の山口県を代表する修史家として知られる中原邦平は、元老・井上馨から聞き出した体験談を関係史料で補筆の上、『井上伯伝』と題して明治四十年、一千部を刊行した。
- ▼本書の記述は幕末迄で終わっており、その主人公は「政財界癒着の元祖、伯爵井上馨」ではなく、彼の前半生「疾風怒濤の時代を命を的に駆け抜けた、志士・井上聞多」である。本書は単なる伝記ではなく、史料に語らせた「幕末における長州藩活躍史」として、また最高の生き証人の語る明治維新のエッセンスとして、非常によくまとめられている。
- ▼明治維新の立役者の一人が、これほど多くを語った史料は他にない。それだけでも類を見ないものであるが、本書にはまた高杉晋作、久坂玄瑞、坂本龍馬、木戸孝允、伊藤博文ほかの、志士とよばれた人たちの生活・行動・実態が、彼らと生死を共にした者の目で、微細にわたって描かれている。
- ▼古川薫氏や司馬遼太郎氏の作家も本書からよく引用しており、後世流布した数々の維新挿話も本書を出典とするものが多く、維新エピソードの宝庫といえよう。
- ▼『防長回天史』が時代背景など細部を詳細に探っているのに対し、この『井上伯伝』は人物の動きを通して維新大業の核心に迫っている。周知の通り『防長回天史』は、その成立段階における伊藤・井上の対立を反映して、井上関係の記述が極端に少ないため、本書はその欠を補うという意義も大きい。本書と『防長回天史』の記述が重なる箇所は少ない。
- ▼「下巻」に収められた六五〇ページに及ぶ書簡集も目玉である。写真石印刷でほぼ原寸大に再現された志士たちの直筆は、そのままだでも強く読者の胸を打つが、そのほとんどは本文中に読み下しがついており、研究者はもちろん、これから古文書を勉強する人にもたいへん参考になる。間口あくまでも広く、奥行き深い本といえる。
- ▼中原邦平については上の奈良本辰也氏の文に詳しいが、嘉永六年に生まれ、その半生を毛利家史料の編纂に尽くし、大正十年に没している。
- ▼今回の復刻に際して、映入り菊判全九巻（本文七巻・付録二巻）の和本を、原寸のままA5判全三冊の洋本に改め、全頁にわたって新しく「通しノンブル」を付した。また『世外井上公伝』から六十三頁におよぶ年譜および家系図を転載した。
- ▼なお井上馨の伝記としてはこの『世外井上公伝』（井上馨公伝記編纂会 一九三三年刊全五巻）があるけれど、その前半生はすべて本書『井上伯伝』に依っており、ほとんどこれを簡略化したものに過ぎない。

- 体裁 A5判 全三巻
- クロス装 上製 箱入
- 合計 二、二五二頁
- 定 価 三万八千円
- 予約特価 三万円 (千共)
- 締 切 93年11月30日 厳守
- 発 売 94年1月下旬 予定

限定二百部 (番号入)

- ▼分割・ポータス払いに応じます。
- ▼書店には御しません。小社へ直接お申し込み下さい。
- ▼僅少数の復刻なので、売り切れのばあいはご容赦下さい。

山口県徳山市銀座一の三  
〒七四五-〇八三四の二九五  
FAX 〇八四〇三三九五  
マツノ書店